生徒指導部通心（信）第 24 号（2022.11.24）

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～渋沢栄一は「日本〇〇主義の父」？～

『青天を衝け』（せいてんをつけ）は、2021年（令和3年）2月14日から12月26日まで放送されたNHK大河ドラマで、「**日本資本主義の父**」と称される渋沢栄一を主人公に、江戸時代末期（幕末）から昭和初期までを描いたドラマです。

この渋沢栄一について、篠浦伸禎さん（都立駒込病院脳神経科外科部長、脳の覚醒下手術（**局所麻酔だけをかけて、患者が起きたままで脳外科手術を行う**）では日本トップクラス）が次のように述べられています。

渋沢の人生を見ると、まさに調和や幸福感に繋がる右脳を主体とし、論理的な左脳がそれをサポートしている。

例えば、渋沢は会社を興すにしても「**合本（がっぽん）**」といって、関わる人々や社会に広く利益を還元し、皆が幸せになることが事業の根本だと考えていました。

また、何百という会社を立ち上げながら、同時に社会福祉事業や教育事業にも取り組んでいます。渋沢は一人で成果を上げようとする、自分が儲けようとするのではなく、常に周りを巻き込み、互いに助け合いながら共存共栄の社会、コミュニティを作っていくのです。これは周囲との調和を志向する右脳主体の人間でなければできないことです。

いま世界には行き過ぎたグローバリゼーション、金融資本主義により、ライバル企業と徹底的に競争し、富や資源を独占し、自分さえ設ければいい、短期的に利益を出せばいい、そのためには合理化を進め、人員整理を進め、多くの人が不幸になっても構わないという経営の価値観、左脳主体の生き方がまん延しています。また、戦後、血縁地縁を基礎にした家族や地域共同体の結びつきがどんどん破壊され、人々はバラバラになってしまいました。いま日本が直面する様々な問題の根もそこにあると考えています。

そのような中で、渋沢の右脳主体の経営、働く従業員、その家族、顧客など皆の幸せを考えた「日本型資本主義（**渋沢の言う「合本主義」**）は、これからの世界を変えていく大きな力を持っていると思います。そして、その渋沢の自他共に栄えていく渋沢の脳の使い方、考え方を受け継ぐ日本人にはそれができると確信しています。

「致知」３月号　特集　渋沢栄一が教える人生をひらく脳の使い方　篠浦伸禎　より

よくこの通心（信）で紹介しているピーター・ドラッガーも渋沢栄一と同時代を生きた実業家・経営者で、徹底した競争により富・資源を独占し、勝利した後の晩年になってから社会福祉事業に取り組んだ石油王」・「鉄道王」などと称されたロックフェラーやカーネギーのようによりも渋沢の業績の方が優れていると述べています。

「経営の本質は社会的責任であり、それを見事に実践してきた渋沢の右に出る経営者はいない。」とドラッガーは絶賛しています。

地球規模の問題の解決のために国際社会で協調して SDGｓの取り組みを進まないといけなにもかかわらず、世界では多くの富・資源の独占をめぐった紛争が起きています。そして生活する場所を失った難民も増えています。

渋沢栄一的な「宇宙船地球号」的な脳の使い方をする国際社会になることを願うばかりですね。